
夏はもうすぐ

りいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏はもうすぐ

【Nコード】

N4964E

【作者名】

りいち

【あらすじ】

自由に気楽な夏の青春の1ページ。

ふいに夏の匂いがした。校庭の隅っこで寝転んだまま、空を仰ぐ。両手を頭の後ろに敷き目を閉じた。明るすぎる太陽のせいで瞼の裏にチカチカと不規則に光が見える。赤やら黄色やらそれはもう眩しいくらい。

真つ黒な学ランが日光を吸収するせいで異様に暑い。かと言っていちいち脱ぐのもめんどくさいので引き続き寝ることにした。カキーンカキーンとバットが球を打つ音が聞こえる。グラウンドでは野球部が汗をかきながら練習に励んでいた。よくやるよ、まあ。どんなに頑張っても甲子園なんか夢でしかないのに。そう思う反面、羨ましくも思う。

「またサボリか」

名前を呼ばれ、目を開けると隆悟がいた。上から俺の顔を呆れたように覗いてくる。何だよ、と再び目を閉じるが、隆悟が立ち去る気配はない。嫌でも感じる視線が鬱陶しくてゴロン、と横向けになると今度は無防備な背中を靴で小突かれた。

「翔、また先輩怒ってんぞ」

「うん」

「いい加減練習出るよ。野球部のエースのくせに」

エースなんて、俺が決めたわけじゃない。そもそもうちみたいな弱小野球部にエースなんて呼ばれる奴がいること自体おかしいのだ。俺はあくまで趣味の一貫として野球をやっているわけで、近づいてくる甲子園という熱い舞台を目指しているつもりは毛頭ない。

二年のくせに生意気だ、と先輩から陰で殴られたこともあった。ただどやっぱり俺は俺のペースでしか生きる術を知らない。体育会系のノリにはついて行けないのだ。

「畜生、暑いな」

隆悟は被っていた野球帽とユニフォームの上着を脱ぎ捨て、俺の横に大の字になる。夏だなあ、そうだなあ、なんて下らない会話を繰り返しながら、すぐそこまでやってきている夏の声に耳を澄ました。

「探してんぞ」
「ほっとけい」

俺たちの名前を叫ぶ先輩の声が遠くで聞こえた。きつとすごい剣幕で、額に青筋なんて作って探し回ってるに違いない。そしてきつと、次に会った時は特別練習だとか何とか理由つけて両脚痙攣するまで走らされるんだろうな。

まあいいや、呟いて俺は再び仰向けに空を見た。隣に寝転ぶ隆悟は何も言わずじっと目を閉じている。練習してきたせいかな、何となく土臭い。

「隆悟、練習行かなくていいのかよ」

「お前こそ」

「また先輩に殴られんぞ」

「お前こそ」

そう言っ て俺たちは笑い合った。遠くで聞こえるバットの音も、先輩の怒鳴り声も、なんちゃってチアガールの黄色い声も全て夏色に染まる俺たちにはどうでもいいことだった。

夏はもうすぐ

(よし、そろそろ練習行くか)

(……の前に先輩とこだろ)

(やっぱりやめた)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4964e/>

夏はもうすぐ

2011年1月27日01時51分発行